

新宿区文化芸術振興会議（平成26年9月3日） 議事要旨

■開催日時 平成26年9月3日 午後2時から午後4時10分まで

■開催場所 新宿区立新宿歴史博物館 2階講堂

■出席者

委 員 高階秀爾 垣内恵美子 星山晋也 大津司 乗松好美 大野順二

原口秀夫 大和滋 佐藤清親 舟橋香樹

（欠席 酒井忠康 今沢章信 ） ＊敬称略

事務局 橋本文化観光課長 原文化観光係長 楠原主任

（欠席 加賀美地域文化部長）

■議事の進行

1 開会

- （1） 高階会長が文化芸術振興会議の開会を宣言し、開会した。
- （2） 高階会長から、前々回会議（平成25年5月）での「新宿文化センターの在り方と運営方針」の議論に関する振り返りがあった。
また、本日の進行について、次第に沿って進行すること及び審議を効率的に進めるため、次第の議事（1）から（3）までを一括して審議することを確認した。

2 議事（要旨）

- （1） 前々回会議内容の確認について
資料1-1及び資料1-2に基づき、前々回会議（平成25年5月23日）の内容の確認を行い、資料のとおり承認を受けた。
- （2） 文化芸術振興の重点項目に関する主な取り組み状況について
資料2に基づき、文化芸術振興の重点項目に関する主な取り組みについて、垣内専門部会長が説明を行い、資料の詳細は事務局が説明を行った。
- （3） 「新宿文化センターの在り方と運営方針」の中間のまとめについて
資料3に基づき、新宿文化センターの今後の在り方と運営方針に関する中間のまとめについて、垣内専門部会長が説明を行い、資料の詳細は事務局が説明を行った。

3 意見交換

- ・文化芸術振興基本条例ができて、この振興会議の運営がはじまって、例えばフィールドミュージアムやクリエイターズフェスタ等の取り組みが進められ、今は新宿の文化芸術の振興が着実に進んできているという思いがあるし、区のポテンシャルが上がってきている。
- ・資料では、端的に環境変化が表されており、新宿区外のホールではどうなっていくか、あるいは新宿区内の主なホールでも5つも閉館になっていることをみると、環境の変化はかなり大きい。この問題をどうしていくかということが、新宿文化センターの在

り方を考える上で、かなり重要である。

- 2020年に東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決まり、東京都、国、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が、オリンピックは単なるスポーツの祭典ではなくて、文化芸術の祭典だという認識のもとに、今後の展開として、単発のイベントで終わるのではなく、オリンピックに向けた文化的な基盤整備をしていくという考え方を持っている。
- そうした中で、この新宿文化センターも一定の判断をする時期に入ってきており、今回の会議の意見交換も含め、次の期で何らかの方向性を出さないと、この辺のいろいろな取り組みができないだろう。
- こうした環境の変化をとらえて、新宿区でも新宿観光振興協会ができるなど、取り組みが具体化してきている。新宿区の文化のイメージアップとしての中心的ないろいろな事業を顕在化することで、実演芸術の分野での新宿文化センターの役割をきちんと位置づけていかなければならない。
- 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会という専門的な団体からの視点では、やはり新宿文化センターは専門的なホールとしてイメージを打ち出すのがよいのではないか。
- その専門ホールとしてもいろいろ分野があって、舞台芸術に進むのか、音楽に進むのか選択肢はたくさんある。
- いろいろな分野を視野に入れた方がいいのか、やはり何らかの分野に特化していった方がいいのか。例えばサントリーホールは音楽、特にクラシックに強いであるとか、利用する側からはそういったイメージがある。
- 新宿文化センターは、一時期は何でもできるホールと言われて利用されてきたが、ホールの利用方法というのは、そのホールの建築上の仕様と密接に結びついているので、あるレベルの公演をやろうとしたら、やはり限界がある。ホールの仕様と利用方法には密接にかかわってくる課題である。
- 新宿文化センターの大ホールは、特に舞台が縦長で広くてあの大きさなので、やはりレベル的にやれるものは限られている。
- ハード面の課題を踏まえつつ、なおかつクラシック音楽界の状況はかなり変化している中で、新宿文化センターとしてどういう選択をするか。音楽といっても、クラシックに特化しなくてもいいし、それこそ国際的な音楽に焦点を当てるとか、ほかの地域と違ったことを発想するということもいいのかもかもしれない。
- クラシック専門のホールがたくさん開館しているので、クラシックだけにこだわらないで、新宿には地域にたくさんある多様な世界の音楽をもう少し掘り起こし、打ち出してもおもしろいのではないか。
- 新宿区の独自性が出るような使い方を目指していくのがよい。
- 新宿文化センターは、設備の老朽化もあるだろうし、ホールの改修を今後見据えなければいけないが、やはり区民がリハーサルや練習できるというのが魅力である。
- 小さい練習室の防音設備の整備や、オーケストラ規模のリハーサルや合唱、吹奏楽のリハーサルができる防音設備の整備することが大切なのではないか。
- 現在もリハーサル室はあるが、大ホールで公演があるときは、音漏れするので、同時に使えないというデメリットがある。

- 防音設備を整えると費用面からも大変だろうが、改修しないとどうしようもない。
- パイプオルガンのことがネックになっているが、思い切って、館自体を壊して新しいものを建てれば、防音設備のある練習室だってできてしまうのではないか。
- 新宿区は思い切ったことをやらないといけないと思うし、「文化センター」という名前のとおり何でもかんでもやるというのではなくて、やはり特色があった方が「顔」が見えてきて、新宿文化センターの認知度も上がるような気がする。
- 新宿区立新宿文化センター条例第1条で「区民に文化的活動等の場を提供し、もって文化芸術の振興及び区民の文化の向上を図るため」設置するとある。設置したときの趣旨と照らして、現状どのように運営されているのか、それから今後何を目指そうとしているのか、また、それが条例上の根拠とどう整合性があるのかを考えなければいけない。
- 周辺に新しい施設ができ、音楽ホールとしての機能が高度になっており、新宿文化センターは相対的には魅力が低くなってきている中で、プロの素晴らしい演奏家が新宿文化センターで公演するということが、本当に設置根拠に合致しているのかを考えると疑問がある。それよりも育成といった側面を、もう少し区民の文化の向上を図るための現状の課題として、考えてもいいのかという気がする。
- 少し話が離れるが、大日本印刷株式会社では、学童や保育といった社会的な課題と文化的な活動とをどのようにつなげることができるかを検討し、美術関係のワークショップのプログラムを開発して、新宿区の市ヶ谷に小さなスペースを確保し取り組みを始めている。
- ワークショップのプログラムとして場を提供して、学校やプログラムを提供する事業者やNPOと一緒に、子どもたちに放課後をどのように使ってもらおうか考えている。
- 放課後の時間帯に我々の施設に来ていただき、我々が開発したワークショップを提供するという活動を少し始めた。区としての子ども向けの課題等がフォーカスできて、かつ、それに対する取り組みとして新宿文化センターを活用してうまく展開できれば、区の文化芸術の振興に少しずつでもつながってくるのではないか。
- 施設別の稼働率について、例えば展示室やリハーサル室というのは恒常的に8割近く稼働率がある。これはやはり近隣住民、区民からのニーズが最も高いところではないか。
- 例えば、今年度は、高文連（高等学校文化連盟）の写真部会の発表（東京都高等学校文化祭写真部門地区大会）で新宿文化センターの展示室に作品を並べ、また、その中から審査員が優秀作品を選び、同じく小ホールで表彰式及び講評会があった。総合芸術高等学校の講堂ホールは1回に520人が入るので、去年までは、同校のホールで表彰式を行っていたが、たまたま今年は講堂ホールが使用できなかったため、新宿文化センターを利用した。
- やはりニーズがあるからこそ、稼働率の高い水準につながってくるように思う。
- ニーズを絞り込むといっても、音楽に特化したとして、音楽ホールはサントリーホールの開設以降優れたホールが都内には多くあり、また、特に若い人たちの芸術に対する考え方、若い世代のクラシック音楽の人口がどちらかというと減少しているように

思われる。資料からも、クラシック音楽の利用割合が、大ホールでも約3割という状況がわかっている中で、クラシック専門に絞っていくというのはなかなか厳しいのではないか。

- 一方で、ダンスを含め、舞台芸術はニーズが大きくなっているように思う。総合芸術高等学校ではコンテンポラリーダンスが盛んだが、講堂ホールを使えるように舞台を特注している。今後はそういうマルチに使えるような施設を追求していかないと、多様なニーズに応えられないのではないか。
- なじみ、愛着を持つという点では、名称も大きな要因となるように思う。区民の意識啓発の1つの方法としては、アンケートをつくるのもなかなか難しいが、場合によっては新宿文化センターのイメージの抽出調査をして、親しみやすい名称があればいくつか出してもらい、最終的に愛称として決めていくということも考えられる。
- 思い切ってネーミングライツを採用することも、施設を維持するには必要となるのではないか。そのときに、やはり区がイメージする名称もあるだろうから、実現できそうなところにオファーを出すというのも考えられる。
- 新宿文化センターという名称は、大人の社交場という感じではなくて、学生が来て勉強しろ、みたいな感じがあって、物々しいというか、ちょっとまじめすぎる気がする。
- サントリーホールというのは、サントリーというブランドネームを使っているし。新宿文化センターも、全く新しいネームを公募するというのも1つの手段。
- ネーミングライツはデメリットとして、とんでもないものが出てくるかもしれないが、それでも区民の関心が高まるし、応募があった中からみんなで選ぶということもできる。
- ネーミングライツの採用はちょっとした劇薬のようであり、場合によっては非常に危険で、場合によっては非常によいということがあるので、プラスとマイナスの両面がある。
- 正式名称は新宿文化センターとしても、利用する一般の人があそこへ行こうよという感じが出るような愛称があってもいい。
- 中間のまとめという資料は、それぞれの芸術的な視点を持つ委員から、本当にいろいろな角度で議論されている。これ以上の意見を出すといっても、基本的にはもう意見は出尽くしたのではないか。あとは行政として方向性をどう定めるかだけだと思う。
- 今日の日本経済新聞では、新宿という街は、住みたい街ランキングで4位となっている。これまでは、吉祥寺や横浜や自由が丘等が挙げられていたが、10位以内に入っていなかった新宿が4位、池袋が9位に入った。やはり交通路線の整備とか東横線の乗り入れであるとか、ほかにも大きなタワーマンションとか、まさにインフラも集中的に整備されるので、ものすごく人口が増え、さらに人が住みやすくなったのではないか。
- 自分たちが学生のときとは大きく環境が変わってきている。特に新宿でいうと、東新宿駅近辺に高層ビルが増え、住人が増え、要するに行き交う人、それも若い人たちが多くなった。新宿文化センターはそうした環境に建っている。
- 舛添都知事はオリンピック・パラリンピックの開催に向けて、スポーツだけではなくて文化芸術も一緒に組んでやるのだと言っている。

- こういったトレンドを考えると、新宿文化センターでもパイプオルガンを廃止するという選択肢はないという気がする。
- オーバーホールにかかる費用が4,000万円弱だとしても、この金額は額面だけでは全然イメージが湧かない。施設全体が老朽化しているということ、また、法律の一部改正により特定天井に係る工事も必要となってくる。天井を全て張り替えるのであれば20億かかるのか、40億かかるのか具体的な金額はわからないが、必要な改修全体にかかる費用からみると、4,000万円とはどんな金額なのか。施設の改修に全部で実は2億円となると、その中で4,000万円を出すなんていうのは大変なことだ。
- 今、新宿文化センター周りの人口は、すごく増えている。これまでもおよそ50万人の利用者がいて、今の人口動態でいうと、今後はおそらく70万人くらいになってくるのではないかと。新宿文化センターはどんどん使ってもらえるように手を入れて行きたいと思う。
- 資料では、ターゲットを3つに分けて、プロ仕様にする、アマチュア仕様にする、その中間にするとあるが、どちらかというと、アマの方を強調するような方向に進めば、区の施設としてのコンセプトに沿っていくような形になると思う。
- この会議の委員は、マーケティング等のプロではないので、最終的にどう決着をつけるかは、一定のコーディネート力を持った人からアドバイスをもらい決めるのがよい。
- この中間のまとめでは、これだけの論点を出しているのだから、それなりの経営力やコーディネートする能力がある人がこの資料を読めば、サントリーホールと喧嘩しても勝てないとか、その方向ではなく地域のコンセプトを生かした、アマチュアをベースにしつつ、いろいろな機能を持つことがいいとか、よいアドバイスが出てくる気がする。トータルの費用の話もその人にはちゃんとオープンにすれば、その予算ではこういう展開ができるというアイデアもたくさん出るのではないのか。
- パイプオルガンについては、個人的には、せっかくあるものをお金の理由で廃止するというのはよくないと思っている。そうでなくても、施設の老朽化とか、天井の修繕とか、一定程度直さなければいけないし、今後新宿文化センターをどのように使うにしても一定の修繕は必要だ。
- 資金面での投資はどちらにしても必要だと思うが、その中でどこにどのようにお金を投入するか。スタッフを充実させるのか、パイプオルガンを残すのか。
- パイプオルガンの話は、シンボリックイメージの問題もあって、オーバーホールにかかる予算の問題はもちろん区にとっては大変大きいと思うが、それでもって、やめようというような話はこの会議としては受けられないと思う。
- 資金面から廃止にするのではなく、今の時点では利用休止で、維持管理に使わないお金を別のハード面のグレードアップに使うというのなら、議論の余地はあると思うし、今後もきちんと議論していく必要がある。
- 新宿文化センターの利用者が50万人から70万人になっていくとして、この施設がこの地域で絶対必要なものだということになったら、その増えた人々が100円ずつ寄附すれば、例えば500万円必要なら、すぐ集まるのではないかと。
- 新宿の人口は確かに増えていると思う。副都心線の東新宿駅ができて、新宿文化セン

ターはとてもアクセスしやすくなった。今までは少し雨が降っていたりすると行くのに二の足を踏んでしまっていたかもしれないが、副都心線ができれば、ということもなくなった。

- 板橋区の文化施設とか、渋谷区の松濤美術館でさえ、少し駅から距離があるように思う。暑い日は行くのが億劫に思うので、アクセスしやすさは非常に大事な要素だと思う。
- 文化芸術振興基本条例ができ、文化芸術振興会議も2期目を迎え、確実に新宿の文化振興が進んでいるように思う。
- 新宿区は、子育てに関する施策に力を入れており、子どもが育てやすいということで、他区に比べても確実に子どもの数が増えている。
- 子どもの数が増えることと比例して、子どもに対する文化的なニーズが高まってきているが、区との協働事業である乳幼児文化体験事業が採択され、26年度には実施事業数も随分と増えた。
- 新宿文化センターの在り方について、あくまで設置目的に沿った運営という面から言うと、文化的拠点として、長期展望をもって、子どもたちに向けたソフト面を充実させてもよいのではないか。
- 年代的にどの年代が新宿文化センターを利用しているのかというと、高齢者層の利用が多いのではないか。やはり、長期展望を図るとしたならば、確実に今の若い人たちに向けて、もう少し教育的なプログラムを行ったり、子どもを対象として学校等にアウトリーチを行ったりする等、もう少しソフト面の広がりを意識して取り組んでもらいたい。
- 利用者の立場としては、安全面や、心地よく使いたいという点でいうと、やはり老朽化していった施設は、安全面を考えながら、また、障がい者の方も含めいろいろな方々が利用できやすいように、必要な修繕を積極的に行っていただきたい。
- 車椅子の利用者が一度地下に降りて、迷路みたいな通路を通って大ホールに行くというのは、たいへんおかしな話であり、いろいろな方々を受け入れる新宿区のおもてなしという部分でいうと、プアな部分だと思う。その辺への対応は予算を惜しまずに修繕を行ってもらいたい。
- 東新宿エリアには新しい商業施設ができて、確実に人の流れが出来ている。やはりふらっと来て、この新宿文化センターを利用できるようになるといい。
- 新宿文化センターは、周辺の施設に比べるとそこだけが何かボンと暗い感じがする。ふらっと寄れる雰囲気はないので、これは指定管理者制度の検討も関係してくると思うが、そうした環境づくりも検討していただきたい。
- 新宿文化センターは大ホールの活用方針を決めてイメージアップができれば、周りの環境もついてくると思う。外部からも人が増えているし、来館者が増えてくるということがわかると、周辺施設も変わってくるので、そうした相互作用があるように思う。
- 例えば、損保ジャパン日本興亜美術館は、子どものためのいろいろなプログラムに取り組んでいるし、図書館や博物館等でも空いている施設を使いながら、ワークショップを企画して、いろいろな人たちに館に足を運んでもらうよう努力されている。
- 図書館だけではなく、美術館だけではなく、いろいろなところとコラボレーションして

いるので、新宿文化センターでもそういう企画を提案できるようなNPOや芸術家のアイデアもどんどん取り入れて、魅力的な催しが常にできて、人がにぎわうような感じのホールにしていけるように、具体的なイメージを持って運営してもらえると、区民としては新宿文化センターに行ってみたくはないか。

- 今後の新宿文化センターの在り方について、やはり老朽化という部分では、あと15年もすれば、開館から50年になるので、いつまでこの施設を使い続けるのか。また、天井の改修はいつまでにやらなければいけないのか。さらには、舞台も開館当初から変えていないと聞いているので、そろそろ更新が必要なのではないか。それによって、今後の在り方は十分に整理しなければならない。
- 計画もなく急な改造をしろと言っても、無理な話だと思う。
- 新宿文化センターの利用者懇談会では、例えばバリアフリーの点でいうと、トイレが地下になっていたりするので、エスカレーター等の設置ができないかという話をして、物理的に難しいと言われる。
- 各部屋の防音等、いろいろ施設の改修の可能性はあるが、予算と絡めると、どこまで対応してもらえるのか。やはり大規模な改修をしないと今後の展望としては難しいと思うので、ぜひこの後も引き続き検討課題としてもらいたい。
- 知名度を上げるためには、人が集まるということが大切だと思う。ふらっと立ち寄れるような企画や展示については、今すぐにでも対応できると思う。例えば夜間、ロビーがたいへん暗い。どうしてもっと明るくできないのか。そういうロビーにも何かしら展示はしているようだが、もう少し何か工夫ができればいいのではないか。
- ロビーには椅子があるが、テーブルが少ない。外部からの来館者を遠ざけているようなイメージがあるし、レストランの業者の選定等、改善できる部分はたくさんある。
- 美術館でも問題になるが、指定管理施設としては、管理費が安ければどのような事業者でもいいとなってしまうと、中身が問題となる。
- 新宿区の場合、音楽専用の練習室というのがない。最近では、杉並公会堂とか、昔でいう江東公会堂が建て直しをして、きれいにして、防音仕様の音楽室ができています。新宿文化センターを建て直して対応するのか、また別のところに何かそういう施設をつくるのか、今後検討してもらえたらいいと思う。
- 我々が知らなかったことや、それからそのように掘り起こされた地域文化財を活用して、例えば子どもたちに文化財を案内するとか、それ以外にもほかの催し物のときにも一種の文化観光スポットとして周辺の文化財を紹介する等、区として活用されればいい。
- 単純に文化財だけを説明するのではなくて、例えばイベントのときに、開催地の近くにある文化遺産を紹介していくことで、それこそ新宿のイメージアップにつながってくるのではないか。
- 文化財のことでいうと、今までは仏像とか、絵画とか、主に寺社の中にあるものを指定、登録していたが、最近は道端にあるものを認定している。石造物とか、こま犬とか、庚申塚とか、そういうものを積極的に取り上げていこうとしている。
- 一方では建築の分野として、江戸時代の建築が多いが、江戸、明治、大正あたりの顕彰が盛んになってきており、区ではこうした文化財の指定や登録を行っている。

- ・特に区の登録・指定とは別に、区の認定というもう少し緩い段階である地域文化財を積極的に顕彰している。
- ・建築探訪というのは、今、割と人気がある。倉敷でも大原美術館の建物だけではなくて、実はこんな建築があったということで、建築探訪の取り組みを行っている。
- ・新宿文化センターのポジショニングとイメージアップということで、3つに分けて、プロ対象とアマチュア対象とその間を想定して整理しているが、これは区の施設、区民のホールという顔もあるので、アマチュア対象をなくすというのは、いかがなものかと思う。
- ・できる限りプロ対象とアマ対象の両方をうまくまとめて、戦略を考えた方がいい。新宿はイメージアップや誇りとか、そういうところに持っていきやすいだろうと思うし、イメージアップとか、ブランド力向上とか、プロ対象の取り組みも何とかやってほしい。
- ・「漱石山房」が今度記念館になるし、中村彝のアトリエ記念館もでき、今度、中村屋のサロンも10月にオープンすると聞いている。こういう文化遺産のようなものが新宿にはたいへん多くあるので、それらをうまく利用することが大切である。
- ・以前、この新宿文化センターの小ホールでも、子どもの将来図の展覧会のような催しをやっていたのを見たことがある。新宿文化センターは展覧会会場としても、もっと活用できるようになればもっとよいと思う。
- ・先ほど、住みたい街という話題があったが、新宿や池袋は若い世代の興味があるものが多いようで、割と女子生徒に人気があるようだ。そういう意味では、新宿は渋谷とかわって若者に人気が出てきているので、新宿文化センターでもターゲットの年齢層も意識しながら事業展開を考えていただきたい。
- ・パイプオルガンはぜひやめないでほしい、壊さないでほしいと思っている。
- ・リニューアルするときは、やはりネーミングの問題を区民に問いかけた方がいいのではないか。
- ・新宿文化センターができたときは、クラシック音楽の殿堂であって、非常に音響もよく、東京ではほぼ唯一非常にすぐれた音楽の殿堂だったという経験があったが、その後、環境や価値観が変化してきており、選択と集中ということは、どうしても考えなければならない。
- ・メディア機器の技術革新ということもあって、クラシック音楽に限らずどの分野でも、いわゆるライブパフォーマンスのニーズというのは、それほど上がってきているものではない。
- ・税金を使って公の施設を運営しているので、どのように運営されているのかが気になる。新宿文化センターは、施設規模からみると年間50万人弱という来場者数があるのに、区の経費は毎年それほどかかっていないように思う。指定管理委託料は1億5,000万円前後といったところで、そのほとんどがメンテナンス費用であり、ハード面にかかる費用と人件費が大半ではないか。
- ・ソフト事業にかかる費用は非常に少なく、その中で、例えばパイプオルガンに年間の維持経費として400万かけていくとか、オーバーホールで4,500万をかけるといことであるとすると、ソフト事業としては非常に少ない予算の中でどうやってそ

の費用を捻出するか。

- どの施設でも同様だが、基本的に建設費よりもメンテナンスにお金がかかる。これは10年か20年かのメンテナンスの費用を積算すると、当時の建設費よりも大きくなるので、メンテナンスをどうするかということが非常に大切である。
- 非常に個人的で主観的な感想だが、やはり地域に愛されるというか、地域の住民がふらっとやって来て、新宿文化センター周辺に集まってくる、中まで入らなくても、少しロビーでくつろぐとか、ロビーの外の公園とか空き地で休むとか、そういう住民に愛されていて認知度が高いという施設は、比較的サポートが多い。
- タイムスパンの視点があり、新宿文化センターは、今、開館から35年なので、あと15年後に、区民からどういう選択をしてもらえるか、この15年間で区民にどれだけ浸透して、私たちのお宝だと思ってもらえるかが重要な要素である。
- 例えば、神奈川県立音楽堂は木造だが音響のいいホールで、老朽化が進んでいるのに、住民の非常に強いニーズがあり残されている。しかも、坂の上に建っているという、立地としても不利だが、それでも残っているのは、ある種、文化財として価値が出てきているのではないか。
- 高崎市にある群馬音楽センターは、音が非常にひなびていて、オーケストラとしては非常に不満があるホールらしいが、その古いホールは基本的に残って、新しいホールを別につくるということになったのは、市民の人たちがずっと使い続けて、愛着があり認知度が高いということもあるのではという感じがする。
- 最終的には、公の施設はインフラ整備を公のお金でやる一方で、事業活動は徐々に民間、あるいはNPOに自前で運営してもらうことが望ましい。
- 施設を使っていくのは住民の方であり、インフラとしての整備は公がやるが、民間の資金や努力をどうやって取り込んでいけるのかが、今後に向けての非常に大きな課題であり、なかなかパブリックなお金だけでは難しい。
- 政策研究大学院大学の隣にある国立新美術館は、実は二・二六事件で決起した兵隊の兵舎跡地であり、建物自体が重要文化財だということで、黒川紀章氏があの場所に建物を建てる時に、ものすごく国会で議論があった。結局、建物の一部を収蔵庫として残して、文化財としての面影を残しつつ新しいものをつくった。
- やはり市民からの愛され度によって施設の将来が変わっていく。
- 今は23区、都心回帰ということで、若い方も、それから年配の方もどんどんと人口が増えているが、このまま右肩上がり人口が伸びていくか。この15年、新宿文化センターが50歳を迎えたときにどうなっているか。恐らく高齢化が急速に進んで、逆に人口が減っていく時代に、東京も入っていくのではないか。
- たしかに、子どもを持つ世代の人口は増えているが、これは要因として区外からの転入ではないか。では、外からの流入が続くかということ、それはなかなか難しいかもしれない。
- 23区でも今保育所等をたくさんつくっているが、学校の増設はしていない。人口動態予測もいずれは下がっていくことがわかっているので、新しく教育施設をつくってしまうとあとあと大変になる。
- 右肩上がりではない時代であることを見据えて、新宿文化センターはどのような方向に

進むのかを議論しなくてはならない。

- オリンピック・パラリンピックを控えているが、ロンドンの事例を見ても、オリンピックの後のことを考えなければいけない。ロンドンの場合は、開催後の街の状況も一応勘案して減築というか、大きめの施設をつくっても、終わった後は、一部取り外して小さくするというようなこともやっている。オリンピック・パラリンピックで文化施策の可能性がグッと広がることも考えつつ、その後のことも考えておかないといけない。
- 国立劇場は、奈落の設備がものすごく立派だが、開館から既に50年を過ぎていて、危険水域に入っており、いずれは取り壊さないと危険であるようだ。
- 劇場施設は耐用年数の問題が大きく、新宿文化センターの場合は、国立劇場ほどの設備はないので、もう少し長く運用できる可能性もあると思うが、設備等の耐用スパンも考えながら運営することが必要である。
- パイプオルガンは、いろいろな施設に設置されている。議論はあるが、個人的な感想としては、国立新美術館のように一部をオブジェとして残すとか、記憶としてとどめるというやり方もありだと思う。
- パイプオルガンにかかる費用の一部を、例えばインキュベーションとか、次世代の育成のために使うとか、何かやり方があるのではないかな。
- この会議の委員の意見を踏まえ、最終的には区民に方向性を示さなければならない。区長の政治的判断ということであれば話は別だが、利用者、住民等の最終的な判断を踏まえるプロセスが必要になってくる。
- 劇場やミュージアムは地域的、地理的な制約があり、劇場に行って鑑賞することになり、また、時間的な制約もあり、時間消費型活動なので、どうしても利用者はある一定の地域の人たちに限られてくるという部分がある。
- もしパイプオルガンのオーバーホールを実施するとすると、試算で4,500万程度かかる見込みである。作業期間は休館日となり、都合で2カ月ぐらひは必要だと思うが、その間の休業補償はこの見積りには含んでいない。
- 今回の会議で第2期委員の任期が終わるが、文化芸術振興会議自体は、なお後に続くので、この中間のまとめを今後どう煮詰めていくか。
- プロ対象にするのか、アマ対象に寄せるのか、その間をターゲットとして整理するのか。対象をどう絞るかということは大きな課題である。どこを対象に事業展開にしても、建物の老朽化の進行や、天井の修繕、それから例えばバリアフリー仕様にする等、安全面に配慮することが必要であり、区としては予算の確保が大変だろうが、一定程度の投資は必要である。
- インフラ整備に関しては必要なことはどうしてもやらなければいけない。しかし、それでほかのことに於ける財源が減るのは困るので、十分に整理してもらいたい。
- 文化に関する予算は、もちろん民間の知恵を借りながらも、やはり実際の事業や、施設整備等、お金のかかるところは区の方針として十分に文化芸術に予算を配当してもらいたいし、これは国に対しても同じことが言える。
- 我々は区の財政にも配慮しなければならないが、この会議自体は財政のことを考える機関ではなく、どうして文化芸術振興をやるかということを考える機関であり、財政

の面からだけ考えて、文化芸術の振興にかかる予算を惜しんでもらっては困る。文化芸術振興会議として、区に要望として伝えたい。

- 芸術監督の採用や、スタッフ層の充実に関する課題は、芸術監督のところへ派遣研修するのか、アートディレクターを配置するのか、展開のやり方はいくつかあると思う。
- 例えば、彩の国さいたま芸術劇場は、当初、諸井誠氏が音楽分野から活躍しており、今は蜷川幸雄氏が芸術監督をやっている。「蜷川劇場」と言われるぐらいで、そのやり方に対して多少の批判はあるにしても、やはり芸術監督のような存在は館のイメージアップには非常にいいし、専門性なり国際的な視点も入ってくる。
- 新宿文化センターの場合は、施設自体は老朽化しているが、設備は非常にいいし、館に携わっているスタッフもよく努力されているが、イメージがよくないので、今まで若干行きにくかった。イメージアップというのは非常に大事である。
- ハード面を改修するだけではなくて、芸術監督やアドバイザーを配置し、新宿文化センターは「この人」が芸術監督としていろいろと企画しているのだ、ということが浸透することは、やはり非常に大きなイメージアップになり得るだろう。
- 館を劇場仕様にするなら劇場専門の係が要るし、音楽仕様にするなら音楽専門スタッフが必要となってくるので、職員を増やすことになるとその分お金もかかる。
- 文化施設では専門スタッフはどうしても必要だと思うが、施設管理には人が配置されても、専門スタッフはなかなか認めてもらえない。
- プロ対象にせよ、アマ対象にせよ、現場の専門スタッフやPR関係の専門スタッフ等の人件費は当然に区でも考える必要がある。
- 音楽関係の専門ホールとして整備すると、ほかのジャンルで使いにくいとか、フランチャイズ化して施設活用をすると個々の一般の人の練習ができにくいとか、プロを重視すればアマの活動の場所が減るとか、なかなか両立しにくい点があり、選択と集中は十分に図らなければならない。
- 施設の修繕という点では、不便のある箇所の改善であったり、照明を少し明るくするであったり、レストランや休憩スペースを十分に活用するとか、これは新宿文化センターをどのように活用するにも通用するので、ぜひ検討していただきたい。
- 例えば、ある美術館では、幼稚園のように子どもの遊び場ともなるような、1～2時間お子さんを集めて面倒をみてあげるような、託児所つき美術館をやっているところもあるようだ。
- 新宿文化センターでも、来館者に対するサービスとして、親子で音楽鑑賞ができるような乳幼児室、親子室のような設備があるといい。
- NHK交響楽団の定期公演は一定の時期にあるが、サントリーホールで聞く方がNHKホールよりもいいように思う。フランチャイズ化までしなくても、NHK交響楽団の定期公演に、1回か2回は新宿文化センターでやるという誘致のような活動はできないか。NHK交響楽団との相談になると思うが、NHK交響楽団に定期的に使ってもらえるとすると、宣伝としては非常によい。
- 新宿文化センターはあれだけの設備があるので、音楽あるいは舞台芸術の殿堂としての方向性は、ある程度確保したい。その上で、一般区民やアマの方に利用してもらえそうな取り組みを考えていく必要も同時にあり、戦略を考えなければならない。

- パイプオルガンは、館のイメージアップにもつながると思うし、予算との相談だが、残す方向で考えていただきたい。
- 文化芸術振興会議の今期委員の役割は今回の会議で終わりとなるが、新宿文化センターに関する課題をきちんと抽出して、目指すべき方向性をこの中間のまとめとして整理したい。
- 区に全て任せるということではなく、この会議としては、新宿文化センターをこういう方向で活用してほしいということ、できることと、できないことも含めて、そこまで我々は考えていくべきであり、区の方としても、ぜひ、文化芸術の振興、それから区の発展に努めていっていただきたい。
- 区は、新宿文化センターをいつまで使うつもりなのかということは、非常に大事なことである。使えるだけ使うのが普通だと思うが、限界があるだろうとも思っている。
- 特定天井に関する改修工事等もどうしても必要となってくるが、財政面も考慮して、区の政治的な判断として、どこまで施設のプラスアルファの改修ができるのか。
- 新宿文化センターは大ホール、小ホール、会議室、展示室とあるが、議論としては、大ホールで考えなければいけないことと、それ以外の施設で考えなければいけないことをしっかりと整理した上で進めていく必要がある。
- 大ホールのキャパシティを維持し続けるのでしたら、しっかりと大ホールを活かして館全体をイメージアップにつなげるとか、会議室、ホール、ロビー等もイメージアップして、もっと人が集まるようなものにするとか、複合的に考えなければいけない。
- 新宿文化センターに関する議論は、各委員から様々な意見があり、要望も含めて区長へしっかりと報告していただきたい。
- 本日の意見を踏まえた上で、もう一度報告書に反映させるような形で、最終的な第2期の取りまとめとする。
- 今期会議では、新宿文化センターに関する論点を抽出し、今後の課題を整理したところまでをまとめ、区長に報告し、新宿文化センターの中長期的な展望等をさらに区で検討し、第3期委員にしっかりと引き継ぎ、この点について、議論を深めていきたい。
- この中間のまとめは、区議会に報告し、区のホームページでも公開するとともに、庁内の関連部署や指定管理者の新宿未来創造財団とも共有し、これからの館の運営に役立てる。また、対応できることについてはすぐに取り組んでいきたい。
- 区議会に報告されるということは、区民に知らされて、今後活用されていくこととなる。

4 閉会

会長のあいさつをもって、午後4時10分に閉会した。